

— 研究資料 —

ロシア帝国軍医・関餘作のロシア通信(一)

大 西 久 男

目 次

- 一、はじめに
- 二、関餘作について
- 三、関餘作ロシアへ
- 四、スモレンスクからのロシア通信
- 五、ペトログラードからのロシア通信
- 六、ドヴィンスクからのロシア通信
- 七、キエフ、ウエルバからのロシア通信

八、ルーマニアからのロシア通信

九、おわりに

※参考文献

一、はじめに

一九九一年の末、七十四年間におよんだ共産党支配のソビエト連邦が解体し、二十の共和国(さらに分裂して増加する可能性)によって、一九九二年三月三十一日に「ロシア連邦条約」が調印された。

これにより正式国名は「ロシア連邦」あるいは「ロシア」となったのである。

この「ロシア連邦」になるまでの歴史を、ごく簡単にふれながらさかのぼってみると、一九一七年の二月革命によって、ロマノフ王朝が倒壊、続いてレーニン、トロツキーなどを指導者とする十月革命で革命側は政権を掌握。ソビエト政権成立以来、ソ連では共産党一党独裁体制を維持し、共産党イデオロギーがすべてを支配してきた。

十月革命で政権を掌握してから七十四年間の歴史には、スターリンが唱えた一国社会主義とそれによる工業化は成し遂げられたものの、大量粛清の恐怖政治で、多くの犠牲者を出した。スターリン時代以降、ソ連共産党の中枢となったのは、中央委員会と政治局で、一九五三年に第一書記になったフルシチョフは党大会においてスターリン批判を行い、雪解け政策を遂行した。

フルシチョフのあとのブレジネフ時代は共産党支配が最も安定した時だと言われている。

八十五年に書記長になったゴルバチョフは、九十年三月共産党をソ連社会の指導的勢力と規定した憲法第六条を破棄して複数政党制を導入、すべての政党、社会团体は平等とされた。そのあとの動きについては現在の状況におよんでいることなので割愛する。

ところで、何故ソビエトからロシアに至るまでのことにふれたかというと、いわゆるロシア革命の前後、ひとりの日本人医師がロシア、ルーマニアの各地でロシア帝国の軍医として医療に従事中、ロシア革命に遭遇するという体験をする。

その日本人医師の名を関餘作という。しかも彼は現在の市立札幌病院（当時札幌区立病院と称した）に勤務したばかりの医師で、彼の父親は激動の明治維新にその名を知られた蘭医関寛斎である。

ロシア革命前の一九一四年（大正三年）に第一次世界大戦がはじまり、ドイツはロシアに宣戦、日本はドイツに宣戦する。

関餘作という人物については、あとで述べるが、彼は第一次世界大戦の時、ロシア帝国陸軍が募集した義勇軍の軍医に応募したものと考えられるが、彼はこの以前から、つまり日露戦争終了後あたりから、ロシア方面へ行く考えを抱いていたようで、このことについてもあとでふれることにしたい。

今回紹介する通信（手紙と葉書）は、ロシア革命前後のロシアとルーマニアの地で、実際に生活し、医療の仕事を続け、多くのロシア人たちと接し直接目にふれ、手に触れた状況、様子などを札幌の友人や恩師に書き送ったもので

ある。

ロシア革命前後や第一次世界大戦中のロシアの現実の実状について、第三者の目で外側から記録されたものはあるが、実際その中で生活した人間の記録はあまり見当らない。

関餘作が書き送った書簡は、何げなく記している様子の記事も、当時のロシアの実情が反映していて、今考えてみれば大変貴重な記録でもある。

彼はまた実状を見つめつつ、しっかりとした批判も忘れていない。

現在のロシアの状況と、ロシア革命前後のロシアの状況を、関餘作の書簡を通して重ね合わせてみると、そこに何かの共通点のようなものが浮かび上がってくるように思えたのは筆者のひとりよがりかも知れない。

特異な道をひたすら走り続けたともいえるひとりの日本人医師・関餘作の書簡はそのままにしておいても、別にどうこうするものでもないし、ただの古手紙と同じように散逸するだけかも知れない。

しかし筆者はパステルナークの『ドクトルジバゴ』をふと思ひ出した。ロシア革命の奔流の中、医師であり詩人でもあったジバゴの波乱に満ちた生涯を書いたこの作品の時代は、偶然にも関餘作がロシアで生活した時代と一致する。筆者はただ関餘作の書簡の行間から、当時のロシアの人たちの知られざる生活史などを読みとることが出来たらと願うだけである。

なお関餘作の書簡の経緯についてふれておかねばならない。

彼の手紙や葉書は、札幌区立病院の同僚、佐山英男氏、恩師の岡山医専生理学教授舟岡英之助氏、佐倉順天堂病院

佐藤恒二氏に宛てたものであるが、佐山氏は北海道医師会の第二代会長を勤めた人物である。

もう十数年も前になるが、たまたま筆者が『北海道医師会史』編纂の仕事に関係していた時、佐山英男氏のご子息にお会いしたことがある。その時、ご子息が一束の手紙を持参されて、——これは父に宛てた関餘作からの手紙と葉書ですが、何か役に立つなら使ってほしい。ただ置いておいても紙くずになってしまうから——というように言われ、筆者はご子息から一束の書簡類を託されたのである。

この時ご子息も高齢であったが、その後数年たつて故人となられてしまった。

いつも気にしていたが、忙しさもあつて託された書簡はそのままにしてあつた。

ただ一度だけ、一部分の手紙を読んだことがある。それはたまたま筆者が某紙に『北海道の医療史』を連載中の時、関餘作が再婚した夫人、関さつきさんを古宇郡泊村字茅沼の「むつみ荘」という特別養護老人ホームに訪ねた時、出かける前に読んだのである。

昭和五十年十二月頃であつたと思う。

ところが最近(平成三年秋)、日本医史学会関西支部と医学史研究会の合同総会において、岡山大学医学部名誉教授の中山沃氏が、関餘作の書簡について発表された。中山氏の発表内容は、関餘作の出身校で恩師の岡山医専の生理学教授舟岡英之助氏に宛てたロシアからの通信が「岡山医学会雑誌」に掲載されたのを中山氏が発見し、興味ある内容であることを述べ、岡山医専出身者にも特異な人物がいることを改めて認識したわけである。

筆者もたまたま日本医史学会の会員で、また関西支部の会員でもあつたので、このことを知り、急に筆者の手元に

ある書簡の整理をせねばと思い立ったわけである。

手紙や葉書の文字は八十年近く経過していることもあって、消えて判読不能の箇所もあり、また発信局のスタンプが文字の上に押されていて読むことが出来ないなど、判読困難なところもあったが、とにかく手紙と葉書の文章を書き写すことにしたわけである。

幸いにも文章中には、プライベートなことについての記述はほとんどなく、大部分が現地の生活状況、一般人の状況、医療の状況などにふれた内容が多かった。

個人史の記述が目的ではないから、こうした内容の書簡の方が、筆者にとっては好都合であつたともいえる。個人に関する記述が多いと、神経を使うのだが、そんなことは全くなかつたといつてよい。

いずれにせよ、ロシア革命の奔流とまではいかなくても、その波風をじかに感じながらの行動であつたことは間違いない。

筆者が中山沃氏とお会いした時も、特異な医師として同じ認識を抱いたことも事実である。

二、関餘作について

それでは関餘作という人物について、その人となりを述べることにするが、餘作の人物像を述べる前に、どうしても父親の関寛斎にふれなければならぬだろう。

寛齋に関する伝記や研究書なども刊行されているから、詳細はそれらに譲ることにしたいが、父親寛齋と餘作の非常に似ている点は、両者のパーソナリティーが大変似ていることである。これは餘作の生涯を考える場合、彼の特異な行動形成とパーソナリティーをどうしても考えてしまう。

筆者は生存中の寛齋や餘作を知っているわけではないから、推論にすぎないが、これまで刊行された寛齋についての研究書などを読み、また現在生存されている直系の肉親にお会いして、お話を聞いたりしても、この思いは一層強くなる。彼の行動形成の原因を、周囲の環境と考えることも可能かも知れないが、どうもそれはあまり強いものではないように思う。

やはり彼のパーソナリティーを避けることは出来ないように思うが、本稿はパーソナリティー研究が目的ではないから、このことは措くとして、ただ関餘作の特異な行動を考える場合に、彼のパーソナリティーを無視出来ないという事なのである。

さて、父親関寛齋はご存じのように、幕末から明治維新にかけて、わが国においては優れた医人のひとりで、明治維新の激動の時には「奥羽出張病院」頭取として活躍、明治新政府になってからは、政府側からの任用の誘いもほとんど断って、寛齋は徳島に帰ってしまう。

関寛齋の出身地は、現在の千葉県東金市東中というところで、十八歳の時、佐倉順天堂に入門、そこで蘭医学を学び、二十二歳で順天堂を終了して開業するが、その後長崎に遊学し、ポンペに学ぶ。長崎遊学はヤマサ醤油の濱口梧陵の全面的支援によるものであった。

当時の長崎遊学といえ、現在の海外留学に匹敵するであろう。

ポンペから直接指導を受け、最新の蘭医学の知識を身につけて銚子に帰って来た寛斎の名声は、近隣にひびいたという。しかし、長崎遊学とはいえ、遊学期間は短かったから、充分な力を身につけたとは考えられないが、評判を耳にした患者が列をなしたとも伝えられている。

しかし彼が長崎から持ち帰った『朋百氏治療記事』などの資料とか医学書類は、やはり最高の情報であっただろう。その後関寛斎は四国の大藩、阿波蜂須賀家の藩医となって徳島へ移る。一八六二(文久二)年のことである。

やがて戊辰戦争が起こり、阿波藩と共に行動をすることになり、官軍の軍医として活動をする。前述した「奥羽出張病院」頭取となったのは少しあとになってからであるが、この戦争は拡大し、鳥羽伏見の役、そして上野への総攻撃が始まる。この時には官軍の傷兵が次々と寛斎のところに運ばれて来た。

この時手当をした負傷者のなかには、薩摩藩の隠密として有名な益満休之助の名も、記録されている。横道にそれるが、筆者に最初に益満休之助のことを話して下さったのは、その頃札幌医大名誉教授であった高山坦三先生だった。高山先生の外に、札幌医大には法医学の八十島信之助先生も医学史の研究をされていて、何度かお手紙を頂いたことなどが思い出される。高山先生が教えていた学生の中に、偶然にも益満休之助の子孫に当たる人がいて、やはり益満という姓なので、先生が聞いたところ分かったという話を伺ったことがある。

外科専門の高山先生も、医学史の研究をされていて、著書も送って頂いたり、随分教えを頂いたことが今でも忘れられない。

さて、益満休之助は「右下腿貫通創、脛骨破碎骨折」、その夜から高熱を出し、テタニウスで死ぬ。テタニウスとは破傷風のことで、この病原菌が北里柴三郎が発見したのは、それから二十年後である。

関寛齋はこの戦いの時、三田の薩摩藩邸から、負傷者の手当を頼まれ、寛齋はそちらへも出かけて治療をし、ちょうどそこにいた西郷隆盛から大変感謝されたというエピソードも残っている。

こうして敵味方関係なく、負傷者の手当をやり、その手腕が認められたためか、続いておこなわれた奥羽越列藩同盟の討伐戦に、奥羽出張病院頭取を命ぜられたわけである。

戦いが終わったあと、新政府の世の中になったものの、寛齋の心境は複雑なものがあつたに違いない。

徳島に帰った関寛齋は世間のいう栄達には一切振り向かず、恵まれない人々のために、真の医道を求めて進む異彩の人間であつた。

関餘作はこのような医師の三男として、一八七四（明治七）年六月十二日、徳島の住吉島村で生まれた。寛齋が徳島に帰って開業した所である。餘作が生まれて間もなく寛齋は徳島町に移った。餘作はこの地で生長したわけである。寛齋が徳島に帰った一八六八（明治元）年の末頃は、国内は維新の荒波が吹きまくり、すべてのことが過度期の、あわただしい世の中であつた。

医学面においても、医学校と病院の設立という動きが起こってくる。徳島でも同様で、徳島へ帰った寛齋は、一八六九（明治二）年九月には新設の徳島病院長に任命される。

しかし、ちょうど同じ時期に、藩籍奉還のことが原因で起こった稻田騒動や、医学校・病院の開院式で伊吹という

政府側の参事に対する騒ぎの責任をとられ、謹慎処分ということになるなど、宮仕えの愚かさを身にしみて味わうことになる。

これ以後、寛齋はあらゆる任用の誘いを断つていくのである。

前にもふれたように、奥羽出張病院頭取として活躍した実績から考えても、新政府における地位は当然予想されただろうが、しかし戦争から帰ってみると、新政府の医制方針はオランダ医学からイギリス医学に変わり、のちにはドイツ医学に変わるといふ状況。また新政府とはいえ薩長が主要を占めるといふありさまを目にした寛齋もあきれてしまう。

官を捨ててさっさと徳島に帰ってしまったのに、伊吹参事の事件で謹慎処分を食うなど全く宮仕えの愚かさが身にしみたと同時に、反骨精神がむらむらと起きてくる。

しかし、死傷者が出るといふ惨事が起きると、そんなことは言っておられない。

たまたま徳島の練兵場の火薬庫が爆発し、多数の死傷者が出る大惨事が起きた時は、寝食を忘れて治療に献身している。この時は治療主任という命令を受け、その救済に奔走する。こんな時は医師としての仕事を優先させるという真の医道を知った寛齋なのである。

関寛齋について述べるのが目的ではないが、関餘作の性格や行動形成を考えるうえでは、父親のそれを述べる必要があるので、もう少しふれておきたい。

さて徳島での医師としての様子はどうかであったか。これは詳しく述べる余裕はないから省略するが、貧しい患者に

は無料治療を行い、一切が無料である。当然ながら生活は苦しい。しかしその上節約をする生活ぶりであったという徹底したものであったという。

とにかく無料患者は有料患者の六倍もいたというから、苦しいのが当然であった。

関餘作は後年、父親と同じように無料の医療行為を行ったこともうなづけるのである。

このことはあとでまたふれることにする。

寛斎の徳島での生活は、多くの物語的内容に富んだ貴重なことがらが存在するが、それは他書に譲ることにして、ここで話を寛斎の北海道入植へと一足とびに移すことにする。

寛斎夫妻が開拓を目ざして北海道へ渡ったのは一九〇二（明治三十五）年、七十二歳の時である。入植地は極寒の地、斗満（現在の足寄郡陸別町）で、妻を札幌に残して寛斎は餘作と共に斗満に行く。

北海道の開拓ということについて、すでに以前から彼は考えていた。四男の又一を札幌農学校に入学させていることから分かる。

又一が札幌農学校に入学したのは一八九二（明治二十五）年、そして卒業論文は『十勝国牧場設計』である。

又一の寄留地は札幌区南四条西十二丁目（現在札幌市中央区南四条西十二丁目）で、ここから寛斎は餘作とともに斗満にむかった。

さて本題にもどろう。関餘作は医師となるため医学校に入学する。岡山医学専門学校であるが、餘作が入学した頃は、第三高等学校医学部という名称であった。

入学時期は断定はできないが、多分明治二十四年であろう。十八歳の時である。

というのは、明治二十五年七月には第三高等中学校医学部に在籍している。と岡山大医学部名誉教授中山沃氏は述べている。^(註1)

しかし、明治二十四年五月に「在学中の餘作、肺炎のため徳島に帰る」という記録^(註2)から推察すると、おそらく餘作は入学早々肺炎になったものと考えられる。

そして関餘作が岡山医学専門学校を卒業したのが明治三十七年で三十歳の時である。就業年限は四年であるのに、十三年間ぐらい在籍していたことになる。

この間、徳島地方を襲った豪雨により、関家も被害を受け、学業を中断して父の医業を手伝わなければならなかった、のではないかと中山氏は指摘する。

在学中、父親寛齋が北海道開拓にむかった時、斗満に同行したのが餘作であつたし、またその二年後にも斗満の関農場を訪ねている。

ところが、記録されている以外にも、餘作は札幌を訪ねている。四男の又一が札幌農学校に入学してから札幌に住んでいたせいもあるが、筆者の手元にある一枚の写真(写真①)には、その裏に「明治三十二年七月撮、岡山在学時代母上ト始メテ札幌へ行く途上」という署名があり、友人の伊藤という人物と写した写真で、東京神田錦町三丁目の工藤孝写真師が撮ったものである。

こうして、度々北海道を訪ねたり、父の医業を手伝ったり、あるいは入学早々病氣になったりして在学期間も通常

の三倍も要したことになるのだろう。

このあたりからも、彼のパーソナリティーの自由さというものをうかがえるような気がする。

一九〇四（明治三十七）年、餘作は岡山医専を卒業し、翌年札幌病院に勤務する。

しかし、彼には平和な病院医師の生活はむかなかったのだろうか。

世の中は日露戦争勝利という環境にあつて、餘作の関心も外地へむいていたのかも知れないと思われる。

明治三十九年の暮れ、彼は札幌病院を退職してしまふ。そして当時の満州へ渡る。

最初の地は大連である。多分満州へむけて出発したのは、明治四十年一月の初めであろう。その理由として、旅順



写真1 岡山医専の学生時代（立姿が関餘作）

から札幌病院の同僚佐山氏に宛てた葉書は、明治四十年一月十四日付になっていて、文面に「十一日夕大連着」と書いている。この葉書が札幌に着いたのは一月二十二日（札幌局の刻印）で、旅順から札幌まで八日間かかって着いたことになる。また同じ葉書に「長春ニハ八百ノ日本人アリ、医者モ一人アリ」と書いているが、誰かからの情報を耳にしたのだろう。餘作が長春へ行ったのは四月頃である。

関餘作は、大連から旅順、そして吉林、それから長春へと移動し、ハルビンに足を踏み入れたたのは、明治四十年四月

二十二日のようである。

長春から四月十八日付で「……小生ハ来ル二十二日哈爾濱ニ行キ永住ノ考ヘニ候……」

しかし、この頃餘作は体調の方が少し悪くなつたらしく「……小生事肋膜炎カ神經痛カ不明ナレトモ兎ニ角ニ吉林方面ハ柳沢君ニ譲リ近日哈爾濱ニ行キ療養ノ目的ニテ当分哈爾濱滞在ノ積リニ候(略)」という文面の葉書は発信地不明で、日付が四月十八日とあるから同じ日に二枚出したのだろうか。ハルビンに行く前のような記述から考えると、同日に二枚出したものと考えられる。七月頃もまだ身体の調子は回復していないらしいが、四十年八月八日付の便りは、

「……僕ノ病氣モ耐ヘ得ル限りハ辛抱シ欧州ヘ接近セント存居候。純粹ノ「ロス」ハ中々善良ニシテ交リ易キカ 猶太、韃靼、□□□ナドハ悪党ノミニテ時々閉口スル事アリ

「ロス」語ハ未タ駄目ナレトモ金サヘアレバ啞々旅行ハ誰レデモ出来マス」

明治四十年八月八日

哈爾濱 関

佐山君

と、書いている。「ロス」というのはロシア人をさしているのであるが、彼の気持ちとしてヨーロッパ方面へ行く拠点と考えたようで、ハルビンでは短期間ではあるが医師を開業したとも考えられる。

というのは、徳富蘆花の『みみずのたはこと』の中の、「関寛翁」の文章の中で、^(註3)

「……食後台所の大きな暖炉を囲んで、余作君片山君夫妻と話す。余作君は父翁の業を嗣いで医者となり、日露戦争後ハルビンで開業して居たが、此頃は牧場分担の爲め呼ばれて父翁の許に帰って居る。……」

(傍点筆者)

と書いているからである。

いずれにせよ、明治四十年という年は関餘作にとっては重要な意味をもつ年である。

第一次世界大戦中、ロシア帝国軍医となつてロシアへ渡ることになるのだが、その前にすでに満州に滞在し、ロシア方面の情報を得ていたから、自分にとっては容易なことであつただろう。

ハルビンに永住する。とまで書き送っていたのに餘作は父寛斎から呼び戻されてしまう。

徳富蘆花が書いていたように、牧場分担のためか、その外の理由もあつてか、そのあたりはよくわからない。

その後、彼は大正三年までは、日本にいたことは間違いない。

明治四十三年と四十四年には、東京都世田谷の蘆花恒春園を訪問している。恒春園に展示されている蘆花の「来訪者名簿」^(註4)には、

「明治四十三年十二月十四日夕 十勝国中川郡本別村斗満 関餘作」

「明治四十四年二月七日 十勝国中川郡本別村字斗満 八十二老 白里関寛」

「明治四十四年二月十八日 旧冬帰北シ今日又夕飛脚シ来ル 斗満之住人 関餘作」

と自筆の署名が残っている。

蘆花の『みみずのたはこと』にはまた、次のように記されている。

「七月初旬、翁の手紙が来て、余・作・君・は・斗・満・を・去・り・、以・前・の・如・く・医・を・以・て・立・つ・こ・と・に・決・し……」（傍点筆者）と。

陸別町郷土叢書『原野を拓く／＼関寛開拓の理想とその背景』の「関寛年譜」によると、大正元年十月八日、餘作、網走監獄医官として着任（網走大曲二号舎宅）。と記されているところを見ると、餘作は斗満から網走へ移ったわけである。しかしその一週間後、父寛斎は服毒自殺し、八十二歳の生涯を終えた。

餘作の心中は複雑なものだったに違いない。

大正三年五月十日、関餘作は上京し、徳富蘆花を訪問した。

蘆花は日記に次のように書いている。^(註3)

「○五月十日（日）曇

早朝関余作が来た。一家六人に種痘してくれた。午餐を食ふて帰る。露西亞語を是非やれと云ふて、語学初步二巻無理に置いて往った……」

蘆花はロシア語の本を置かれ、閉口したようで、五月十五日の日記には、「関余作にはがき出す。露西亞語は二年間延期云々」とある。

蘆花を訪問した餘作は、おそらくロシアへ行く考えを話したに違いない。日記にはそんな記述は見当たらないが、ロシア語の本を置いて、ロシア語を是非やるように蘆花にすすめた以上、餘作は当然ロシア行きの心中を語ったことは、想像に難くはない。

餘作が岡山医専を卒業する少し前に、母は札幌で病没し、今また父を失い、父と四男又一との牧場経営についての意見の相違などを考えると、彼は牧場経営には興味を持たなかったかも知れない。蘆花が『みみずのたはこと』の中に記したように、父親寛齋からの手紙をあげ、「余作君は斗満を去り、以前の如く医を以て立つことに決し、自身は斗満に留ることを報じた」という文面から考えると、父親は餘作が医業に専心することを承知したのだろう。両親を亡くした餘作には、日本に留まる理由もなかった。牧場経営は又一がやっていけばよいのだ。と思ったのであろう。明治四十年満州へ渡った時に、すでにロシア方面の情報を得ていたから、いよいよその予備知識を活用する機会が来たと、内心秘かに決するところがあつたに違いない。

三、関餘作ロシアへ

一九一四（大正三）年六月二十八日、オーストリア皇太子暗殺に端を発して、第一次世界大戦が始まった。暗殺の犯人は十九歳のセルビア人であつた。

七月オーストリアがセルビアに宣戦、八月には独・オーストリアと英・仏・露との間に宣戦布告がかわされ、世界大戦に発展。

さらに日本・ルーマニア・ギリシャが英仏側に、トルコ・ブルガリアがドイツ側に参戦し、イタリアもドイツ・オーストリア・イタリアの三国同盟を破棄して英仏側につくという、まさに世界大戦となつた。

日本は日英同盟を理由にして参戦する。

関餘作にとっては、好機到来であつたろう。

そのころのロシアは、日露戦争の不利と増大した戦費の負担などの問題が陰をおとし、国内的にも社会革命を志向する動きがひろがつていた。一九〇五(明治三十八)年一月、首都でおこつた「血の日曜日」事件をきっかけに、ストライキがロシア全土に広がり、武装蜂起に発展した地域もあつた。

一時は革命の動きも、退潮の方向にあつたものの、一九一二年以後、再び労働運動や一揆が活発化していく。

こうした不安な状況下にあり、十分な準備のないままに、ロシアは大戦に突入してしまふ。

政府と国会内の反政府派との対立は激しくなり、それが先鋭化していくようになる。

このような状態の時に、ロシア陸軍の戦力を整えることは難しい状況にあつた。

当然義勇軍の募集という手段を、政府もとらざるを得ない。

関餘作はロシア陸軍が募集した義勇軍の軍医に応募したと考えられる。

とうとう彼は日本の地を離れ、ロシアへむかつて進むことになるのである。

関餘作が日本から最初に到着したのは、ウラジオストクである。

大正四年春であらう。確かな月日は不明だが、港が氷る寒い時期を避けて、暖かくなつてから出発したのではなからうか。

以下、ロシアからの通信を紹介していきたいが、整理の都合上、ロシア通信に番号を順につけていくことにしたい。

通信文のあとには、必要によってコメントをつけていくことにしたい。

四、スモレンスクからのロシア通信

〔ロシア通信 1〕（大正四年七月十七日）

札幌区立札幌病院外科

佐山 大人

拝啓、爾来御不音厚謝致候、昨今ハ此地モ愈夏景色ト相成申候（……略）

例・ノ・従・軍・ノ・件・ 先日漸ク公式ノ手続相済候へ共万事愚図々々ノ国柄トテ中々ニ決定セサルニハ閉口致候 先ツ
百年計画ノ積ニテ候 阿々（傍点筆者）

七月十七日

於浦塩 関



写真2 ウラジオストクから友人に出したはがき

この葉書(写真②)が敦賀に着いたのが、大正四年七月十九日で、写真では判断しにくいだが、敦賀での刻印の数字は〈19. 7. 15〉で終りの15は、実は一九一五年のこと。あとは七月十九日を意味していて、この型はこのあとの通信文でも同じ型式なので、説明をつけ加えることにした。

文面の「例ノ従軍ノ件」というのは、軍医応募である。公式の手続き書類を提示したが、「愚図々々ノ国柄トテ中々ニ決定セサルニハ閉口云々」と書いているように、内心百年計画ぐらいに考えていた。それが予想していたより早く許可が下りたらしい。許可が下りた月日は確定できないが、勤務地はスモレンスクであった。

十月二十七日付で、スモレンスクから次のような便りを出している。

〔ロシア通信 2〕（大正四年十月二十七日）

拝啓、愈昨日ヨリ医務ニ従事ノ身ト相成申候 朝十時ヨリ十二時迄ニテ諸事終了 誠ニ閑散、万歳也然シ午後
ハ更ニ何レカニテ作業セント交渉中ニ候 「ロシア」人ノ事業概ネ此ノ如シ吞気ナル哉（後略）

十月二十七日

スモレンスク 関 餘作



写真3 関が勤務したスモレンスクの陸軍病院（以前は将校クラブ）

軍医の応募手続きを済ませたのが、前掲の「通信1」の日付から考えて七月上旬か。

スモレンスクに着任し、医務に従事（写真③）したのは「通信2」の文面から考えると、十月二十六日と仮定できる。

当時、ウラジオストクからスモレンスクまで、汽車で何時間かかったのだろう。

その頃のシベリア鉄道は、帝政ロシアが極東経営の必要から、一八九一年に西はチェリヤbinsk（CHELYABINSK）、東はヴラディヴォストーク（VLADIVOSTOK）を起点として同時に起工したが、日露間の情勢緊迫に対処し、とりあえず東清鉄道（ハルビン経由）の短絡路によって一九〇四（明治三十七）年完成したが、日露戦争後ハバロスク回りによる本線建設にかか

り、一九〇八年着工し、一九一六年に完成した。

シベリア鉄道は最初単線であつたが、一九三二年複線化に着手、三十七年全線複線化した。

全長九、四〇〇キロという世界最長距離の直通列車だが、関餘作がスモレンスクに着任した時は、本線完成の前年であつたから、彼はハルビン経由の東清鉄道を利用したと思われる。それにしても相当な日数を要したに違いない。

『シベリア鉄道九、四〇〇キロ』（宮脇俊三著、昭和六十年、角川文庫）を読むと、著者はナホトカからモスクワまで約十日間かかっている。関餘作はハルビン（哈爾濱）からコンチュウリー（満州里）まで行き、満州里でモスクワ行きに乗り換えたのだろう。

ハルビン経由とはいえ、モスクワまでの乗車日数は二十日間是要したのではないか、と考える。前掲書の宮脇氏は約十日間かかっているが、スピードの差（汽車の）を考えても二十日間是要したのではないか。

そしてモスクワからスモレンスクまで、また別の乗物を利用しなければならなかった。

葉書の日付は十月二十七日だが、敦賀の刻印は十一月二十二日となっている。

およそ一ヶ月近くかかつて、敦賀に着いたことになる。

関餘作がウラジオストクで、軍医の任命許可が下りて、直ちにスモレンスクに向かったとしても、スモレンスクに到着するまでの乗車日数などを考えると、許可が出たのは九月下旬から十月上旬あたりであろう。

岡山医大名誉教授中山沃氏によれば、『岡山医学会雑誌』（大正四年十月刊）に、

「欧州大戦乱に際し、かねてロシア軍に出願中の関餘作は、先般その許可に接し、ロシア国陸軍一等軍医に任ぜられ、

目下同国軍隊付として奮戦中なり」

という記事の掲載があるという。多分これは岡山医専時代の恩師である舟岡英之助生理学教授に出した手紙からわかったことであろう。

ロシア帝国陸軍の一等軍医として、関餘作はいよいよ仕事を始めることになる。

医務に従事したとはいえ、午前の十時から十二時までで、すべてが終了してしまうとは我々には想像できない。彼は午後にも何か仕事をしたい、と交渉中だと書いている。

この頃のロシア国内の事情は、餘作が書いている勤務状態が表すように、軍人とか軍隊にも多くの問題があつた。前にも触れたように、十分な準備のないままに大戦に突入したロシアは、国内の戦場化さらに労働運動の活発化にともない、鉄道輸送力の低下、そのため都市の食糧事情が悪化するなど、国民の不満は高まるだけで、なかには軍隊の一部が労働者に合流してストライキ・デモをするという事態が起こっていた。

こうした国内事情では、陸軍の病院とはいえ、勤務状態も適当に処理されていたのだろう。関餘作にしては、勤務してはじめてわかったことであつたに違いない。

やがて大正四年も終わり、大正五年の新年を迎えた餘作は、佐山氏に年賀の便りを出す。

〔ロシア通信 3〕（大正五年一月元旦）

賀正 大正五年元旦

雑煮モ餅モナキ異国ノ新春、余リ感心セヌガ時ト
運ト諦メ居候 是レハ僕ガ毎日午後ニ通勤ノ病院ニ
候 元来ハ女学校ナルガ戦時ノ為メ病院トナル

この葉書の裏の写真は、文面にあるように女学校だった(写真④)。それが病院に変えられたようで、気になるのは女学生がどこへ移って、勉強しているのだろうかということである。

着任した時は午前十時から十二時の勤務で、すべて終了ということであったが、今度は午後の勤務となったようである。

病院になった建物は、なかなか立派な建物である。この葉書はどういうわけか、敦賀に到着したのは、四月十七日で随分日数がかかっている。

〔ロシア通信 4〕(大正五年三月二十九日)

先日ハ御手紙正ニ難有拝見仕候 其内ニ独乙ヲ負カシ沢山ニ色々ノ物ヲ持帰り可申候(傍点筆者)

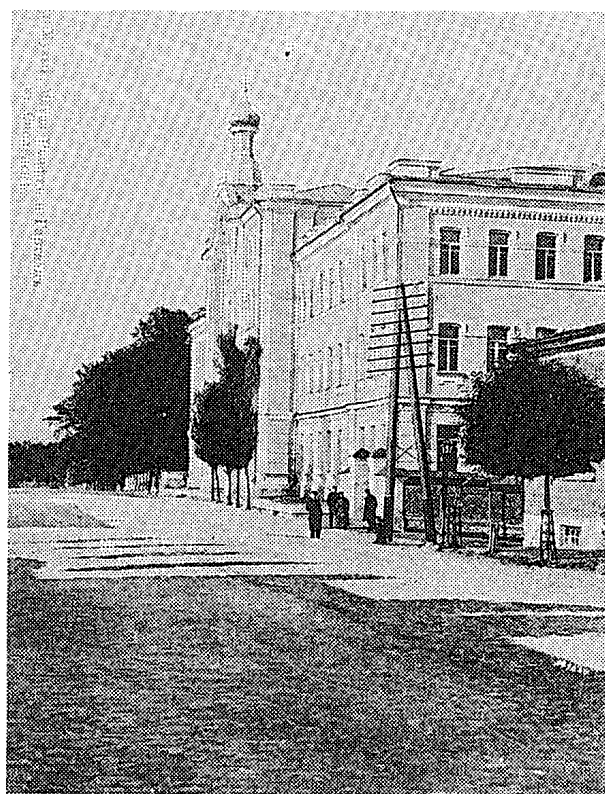


写真4 関はこの病院でも勤務した(以前は女学校)

三月二十九日

関 餘 作

この通信は非常に簡単に終わっているが、独乙を負かして沢山品物を持ち帰ると、のん気なことを書いているが、この頃のドイツとの戦いはどんな状況にあったのだろうか。

第一次世界大戦が始まると、最初ドイツ軍はフランスに突入し、パリをおびやかした。

ドイツ軍は敵の準備ができないうちに、まずフランスを粉碎し、それから軍隊を東方に転じてロシアを攻撃する考えであった。

しかしフランスに進入したドイツ軍は、フランス軍にやぶれ、ドイツ軍は前進を阻まれてしまった。いわゆる西部戦線では、ドイツの作戦計画は最初から失敗してしまう。

一方、東部戦線では最初ロシア軍が優勢であったが、あとになって逆転し、ドイツ軍はロシア軍を粉碎する。この時の戦いが「タンネンベルク会戦」とよばれているものである。

しかし、この会戦も全体の戦局には大きな影響をもたらさなかった。

ドイツ側はロシアからの攻撃を、ようやく支えるだけで精一杯の状況にあった。

また制海権もイギリスの手に落ちる、という情勢にあった。

しかし戦争は一進一退の状況が続くが、ドイツ・オーストリア側に対する経済的封鎖は二国の国民生活にとっても、また軍需品の面でも大きな影響を与える結果になる。

はじめ、東ヨーロッパの戦場ではドイツ側が有利であったが、長期化する戦争は、やがて経済的・社会的影響を大きくし、新しい兵器の発達は破壊力を増すだけでなく、一般市民の安全をもおびやかすことになっていった。

また中立を保っていたアメリカが、一九一七（大正六）年、ドイツに宣戦を布告する。このアメリカの参戦は、大戦の将来に大きな影響を与えることになる。

そしてロシア側もドイツ側も、長びく戦争のために人民の生活は苦しく、戦線の兵士も飢えにさらされることがでてきた。

関餘作はスモレンスクへ来て医務についたのだが、戦線からの負傷者が送られてくるのも多くなかったようである。

前出の通信4より、少し前には「……毎日殆ど隠居同様二遊ヒ居候」と書き送っていることから考えても、スモレンスクの生活は戦線に近い場所なのに、平穏な生活であったようである。

多分、ドイツは敗北するだろうという、情勢判断をしていたのだろうか。四月（大正五年）に入って、彼はスモレンスクの駅で夜勤をすることになる。

週一回の夜勤であるが、負傷者が列車で後送されてくるのだろう。その手当をするためであるが、大抵二時間位で終わってしまう。



写真5 関がスモレンスクで下宿していた家の候爵夫人と娘

スモレンスクでは、関餘作はロシアの侯爵家に下宿して、陸軍病院へ通勤していた。
侯爵夫人ウフトムスコイと令嬢と三人で写した写真が残されているが、令嬢は大変な美人である（写真⑤）。
三人で写した写真の裏側には次のような署名がある。

佐山大人机下

大正五年六月　ロシア　スモレンスク

関　餘　作

侯爵夫人　ウフトムスコイ

令　嬢

〔ロシア通信　5〕（大正五年六月九日）

（前略）戦争ハ少シモ発展セズ從ツテ小生等ノ勤務甚ダ気楽ニ候。コノ様ノ事ナラバ何年続クトモ更ニ不苦候。
独逸ガ数年モ継続スル積ナラバ大ニ面白シト存居候。

然シ近日ノ新聞ニ拠レバ塙軍大敗北ノ由ニ付或ハ戦局早く終了スルヤニ言フ人モ有之候（中略）

ロシアニテハ第一線ノ後方一邦里ノ所ニアル繙帶所ニハ軍医五人看護婦十二三人、兵卒數十人アリトノ事ニ候。ロシアニテハ人口ノ多キ故ニヤ頻ニ兵隊ノ立番セルモノ多ク候。從テ繙帶所ナドモ事故ナク閑散ノ時ハ皆唯坐食スルノミトノ事ニ候。

此西部方面ノミニテモ軍医ハ七千人、看護婦一万二三千人トノ事ニ候。

ロシアハ冬コソ却テ銀世界ノ美アリテ痛快ニ候。夏ハ塵埃飛ビ不潔甚ダシク候。然シ夏トハ言ヘ僅ニ上衣ノミ夏服ニシテズボンハ冬ニ候。外套ハ必要ニ候。此ノ如キ氣候トテ到来日本ノ如キ米麦ハ出来ズ例ノ黒パンノ原料タルライ麦ノ如キ物コソ適當ト存候。黒パント言ヘバ始メハ甚ダ不好物ナリシガ其新鮮ノ物ニバターヲ塗布シ食塩少量ヲ撒布シテ食スレバ中々美味ニ候。

酒ハ目下禁制ノ由ナレドモ医師ノ処方ヲ得テ憲兵司令部ノ認可ヲ得バ買求メ得候。小生モ二三回既ニ之ヲ試ミ申候(中略)

ロシアノ医界ハペトロ(注・ペトログラード)、モスクワノ事ハ知り申サズ候ヘ共、此地ナドハ御話ニナラズ候。確日本以下ナリ。将来日露親交ト共ニ日本ノ医師ハ公然露領ニテ開業スベキ様ソノ筋ノ尽力アリタキモノニ候。目下浦塩ニ、二三ノ医師アルモ皆在留日本人ニ対シテ診療スルト言フニ止マリ、公然露人患者ヲ取扱フ能ハズ、特ニ日本人死亡ノ時モ其診断書ヘ露医ノモノヲ要スル次第トテ誠ニ不自由千万ニ候。

この書簡は大正五年六月九日付で、岡山医専教授舟岡英之助氏宛のもので、発信地はスモレンスクで、日本到着は

十月十二日。

舟岡教授宛の書簡は、岡山大学医学部名誉教授中山沃氏の御好意によるもので、当時の岡山医誌に掲載されたものである。

勤務地の様子、医療事情、戦局の状況などをうかがい知ることが出来る。

五、ペトログラードからのロシア通信

前掲の書簡（ロシア通信5）を、恩師の岡山医専舟岡英之助生理学教授に宛てて出してから間もなく、関餘作はスモレンスクからペトログラード（今のレーニングラードで、一九一四〜一九二四年こうよばれた）に召換された。

一九一六（大正五）年六月三十日付で、友人佐山英男に、ペトログラードから最初の手紙を出した。

〔ロシア通信 6〕（大正五年六月三十日）

僕一昨日此地来着、昨日ハ橋本大尉氏同道軍医部ニ行キシニ敢テ憂スル程ノ事モナカリキ、畢意他ニ移転ノ命令ナリキ。此様な事ナレバ「スモレンスク」ヨリ直接該地ヘ行キシニ如カス、多分「ドヴィンスク」ニ行ノ事ト存候。該地ハ目下武田大尉アリ「スモレンスク」ヨリ戦場ニ近ク大ニ面白キカト存候。「ペトロ」ハ日出二時、日没九時半、十二時頃ニテモ日本ノ夕暮ノ如シ（後略）

六月三十日

ペトログラード 関 餘作

手紙から判断すると、ペトログラードに着任したのは、大正五年六月二十八日である。
第一次大戦が始まると、日本の軍人が戦況視察のためか、この方面にやって来ていることを、手紙の中でもふれている。

〔ロシア通信 7〕(大正五年七月四日)

拝啓、僕先日此地ニ来ル。然シ近日マタ田舎行ノ筈。目下ハ此地ノ陸軍病院ニ勤務ス。最大ノ病院ニテ重症患者ノミヲ扱フ。外科医長ハ軍医少監ニテ頗ル老練家、今日モ盲腸炎ノ手術アリキ、一寸風変リノ処アリ。日本ノ赤十字ハ今猶ホ存ス、二医残レリ。日本ノ赤十字医長月給千二百円、看護婦長五百円、看護婦三百円ヲ与ヘシ由。
「ロシア」ニテハ看護婦ハ五十乃至百「ルーブル」ナリ。日本赤十字ノ濫費ニハ毎々愕ク可キニ候(後略)

七月四日

ペトロ 関 餘作

ペトログラードに召換された関は、次の勤務地へ行くまで、ペトロの陸軍病院に勤務する。次の勤務地は「ドヴィンスク」だろうと予想しているが、その通りになる。

ここの陸軍病院については、最大の病院で外科医長は大変老練家であると書いている。

意外に感じたのは、日本の赤十字がまだ残っていて、医師も二名いるということである。

日本もドイツに宣戦したから、ロシア陸軍の負傷者の治療にロシア側の応援に来ていたのだろう。

驚くことは、日本赤十字の医師や看護婦の月給の高いことだと言っている。「日本赤十字ノ濫費ニハ毎々愕ク可キニ候」と。

戦場だから月給も高いことは理解できるものの、ロシア側との差の大きさに、関は驚いたに違いない。大正五年頃の日本の物価はどのくらいであったのか。

よく言われるように、第一次世界大戦の勃発は、明治末期から不況にあえいでいた日本の経済界にとり、まさに「天佑」であつたという。

ヨーロッパ各国からの軍需品その他の需要が殺到し、輸出は急増し「成金」時代と変わっていく。しかし、成金階級を生みだした一方では物価の高騰をまねき、勤労者の賃金はそれほど上がらなかったから、勤労者の生活は逆に苦しくなつていった。

また米穀商人の買い占めなどのため、食料不足の状態が表面化し、のちの「大正の米騒動」に発展する。

河上肇の『貧乏物語』が刊行されて、大いに読まれたが、この本は大正五年に出版されている。

「また大正デモクラシーの自由な文化の風が吹きぬけた時代で、一杯五銭のコーヒが大衆に親しまれ、五銭、十銭のキャラメルや洋菓子が文化の香りを与え、円タクが三十銭、五十銭で都会の街まちを走つた」^(註6)（「物価抵抗史」という。大正七年の小学校教員の初任給十七円、大正中頃の物価は米一升五十銭、清酒一升二円、とうふ一丁四銭^(註7)というこ

とだから、関餘作が日本赤十字の濫費に驚いた手紙を書き送った大正五年の物価を推しはかることができよう。大正三年の物価を一〇〇とすると、大正七年には二三〇と二倍以上上がっているのに、賃金指数は一五七にしか上がらず、^(註8)実質賃金指数は六十八に低下しているのである。

官立大学卒業の役人の初任給が五十円だったころ、ロシアで負傷兵の看護に当たっていた医師や看護婦の高給に疑問を抱いたのである。

この大戦で利益を多く得たのは海運業、製鉄業、造船業などあらゆる産業部門にわたっていた。国内だけでなく、企業はロシアへも足を伸ばしていた。関餘作は「此地ニモ日本人ニテ戦争ノ為メ成金党数人居由ニ候。大倉、三井、三菱、久原、及三共ノ店員等ハ目下滞在……」(七月十一日付 ペトロ)と書いている。

ペトログラードでの陸軍病院勤務は、一時的で、次は「ドヴィンスク」に行くだろうと予想していたことは、前にもふれておいたが、そのことが明確になり、札幌区立病院の友人に葉書を出した。次のような内容である。

〔ロシア通信 8〕(大正五年七月十四日)

僕事愈々明後日ハ「ドヴィンスク」へ出立ノ筈、同地ニハ目下武田砲兵大尉アリ。愈々弾丸ノ音聞キ得ヘリト存候。

秦医長殿愈々月桂冠ヲ頂キ賜ヒシ趣万歳々々、之レハ此地ノ銀座ニシテ夕方ニハ三々五々昆虫出沒ス。明日ハ福田陸軍中尉一行来ル由、先ハ右迄。(傍点筆者)

七月十四日

関 餘作

ドヴィンスクは、戦場に近い場所であるため、弾丸の音が聞こえるだろうと書き、また一方ではペトログラードの風俗の一端にふれて書いている。

六、ドヴィンスクからのロシア通信

〔ロシア通信 9〕（大正五年七月二十三日）

（略）僕ハ去十九日夜十一時「ペトロ」発車翌日午后一時此地到着、直ニ軍医部ニ行キ長官ニ会シ其日ハ旅館ニ一泊シ翌二十一日ヨリ此病院ニ勤務スル事ニ相成申候 此病院四一四号野戦移動病院ト称シ出發命令后二時間以内ニ出立スヘキ筈ノ者ニシテ万事カ簡單ニ候。軍医皆若キ人、僕ト共ニ四人、看護婦ハ六人、内一人先年哈爾濱女学生時代ニ日本ヘ觀光団トシテ行キシ女アリ。マタ軍医部ノ一軍医少監ハ旅順籠城ノ人アリ何レモ皆親切ニ候。此町ハ昨年敵軍接近ノ為メ住民ノ大半ハ遁亡シ今ハ唯猶太人及貧民等ノ残レルニ過キス、夫レ故ニ下宿ス可キ民家ナドハナク軍人ハ皆其官衙ニ住居ス。僕等モ即チ其ノ例ニテ此病院ニ起臥ス御馳走ハナケレトモ肉ト乳ハ沢山ニアリ諸人皆会食ノ事トテ中々賑カナリ。

看護婦カ立去リシ後ハ昆虫會議到ル処相同シ。

目下此方面モ戦争ハ活動ナキ為メ僕等ハ甚閑散、今日僕ノ受持ハ僅ニ八人ノ交換ノミ、然シ二三ヶ月後ニハ或ハ他ニ転スルヤモ知レス（中略）

此地ニハ武田大尉ハ此軍ニ見学ス、然シ立派ナル舎宅ニ住シ從卒一人アリ毎日午後一二時間一寸作戦部ニ行クノミナリ、実ニ氣楽ナル生活ナリ。

「ロシア」人ハ戦争ハ日本人ノ如ク一生県命ニハナラス愚図々々のナリ、昨年以來此方面ノ少シモ変化ナキヲ見ルモ大抵ハ察シ得ラレケル（中略）

僕ヘハ下ノ通り露文ニ限ル（傍点筆者）

餘作

（※原文は露語だが、日本語にして呈示する）

ロシア ドヴィンスク

414 野戦病院

関 餘作医師殿

ドヴィンスクはロシア側にとって、戦場に近い所で、四一四号野戦移動病院が設けられていて、関餘作はこの病院で勤務したのであるが、戦争らしきことも起こっていないようで、それはロシア人は「日本人ノ如ク一生県命ニハナ

ラス愚図々々のナリ」と言っているあたり、彼等の国民性を言い得ていて興味深い。この手紙が札幌に着いたのが、九月四日である。ドヴィンスクから札幌まで四十日かかって到着したことになる。

関はこの便りを出して間もなく、岡山医専の恩師舟岡教授に手紙を書き送った。内容は前文と重複している個所もあるが、次の「ロシア通信10」である。

〔ロシア通信 10〕（大正五年八月一日）

私事去六月末スモレンスクよりペトロに召換セラレ滞在三週ニシテ又此ノ田舎ニ来リ申候。此地ハペトロより諸欧州ニ通ズル街道筋ノ町ニ候。然シ昨春秋独兵ノ接近ニ際シ住民ノ大半ハ離散シ今ハ僅ニ貧民カ猶太人ノ残り居ルニ過ギズ候。

目下ニテハ敵ニ近キ処ハ二邦里乃至五邦里位ニ候。然シ屢々敵ノ飛行機ガ此町ノ頭上ニ来ル位ノ物ニテ別ニ戦闘ハナク昨春秋以来味方モ敵モ同一ノ状態ニアリ、一体ニ露西亞人ハ戦争ヲ以テ死的ノ事業トハ思ハズ将校ハ六箇月勤務スレバ七週間ノ休暇アル由ニ候。未ダ戦争ハ前途遼遠ト存候。

唯独逸ノ閉口垂レルヲ待ツ物ノ様ニ候、先ズ猶ホ一年間位ハ継続スルナラント存候。此病院ハ軍医四、看護婦六、看護卒乃至雑兵八十人ヨリ成立シ今ハ中学校舎跡ニテ経営シツツアルモ一朝出立命令ヲ受ケレバ二時間以内ニ該地ニ到着スベキ筈ノモノニテ馬車ハ二十台余常備到居候。（中略）

小生モ昨春秋従軍以来早クモ一閱年ニナラントス、露西亞ノ事情ハ幾分カ了解致候ヘ共未ダ完全ナル言葉ハ出

来ズ殆ンド閉口ニ候。日夕露語ノ勉強ハ相勤メ居候ヘ共何分ニモ最早老書生ノ事トテ思フ様ニ進歩セザルニハ閉口ニ候。

戦争ハ小生一身ニトリテハ可成長カラン様祈居候、其間露語勉強ノ積ニ候。

自分ハ日本ニハ不適當ノ人物ナリ。将来ハ西比利亞永住ニ付何事ヲ措キテモ露西亞語ノ勉強ハ必要ニ候。(中略)小生ペトロ滞在中ハ該地陸軍病院ニ勤務致候、該地ハ都会丈ケアリテ中々ノ優秀ノ人物有之候、手術ナドノ巧妙ノ人往々有之候

日本ノ赤十字社ハ其退去後ハ露西亞赤十字ニ元ノ如ク経営シツツアリ、二人ノ日本医師残り居候。序ナガラ一寸日本赤十字社ノ事ヲ申上ゲ候。露西亞ニテハ看護婦ハ五十ルーブルヨリ百二十ルーブル迄ノ月給ニ候。

然ルニ日本ノ物ハ看護婦ニ対シテスラ月給三百円(目下百円ハ百八十五ルーブルヲ払渡候由。)從テ院長ヤ諸職員モ高給タリシハ勿論ト存候。寄附金ヨリ成立スル赤十字社ノ財政紊乱ハ誠ニ日本人ノ公德心乏シキヲ示ス物ト存候。

日露協約愈々成立ノ由願クハ日本医師モ露領開業許可ノ是非ニ尽力有リ度キモノニ候。(以下略)(傍点筆者)

戦線に最も近い所なのに、別に戦闘はないらしく、敵の飛行機は来ても別に被害はないという、いささか信じられない状況で、それも「露西亞人ハ戦争ヲ以テ死的ノ事業トハ思ハズ」と書いているのも、大變興味深い。

また彼にとっては、日本赤十字社の医師たちの高給には、相当腹が立つたらしい。前にもこのことにふれたが(口

シア通信 7)、日本人の公德心の問題だと言っている。

彼は晩年、北海道の国富という街で開業するが、その時、貧しい患者から金を取らなかったと伝えられているが、彼の父親関寛斎も同じことをやっている。

親子共通した心情に心が動かされるような気がする。

また将来は西シベリアに永住したいと考えていたのだろう。何をおいてもロシア語の勉強を続けたいから、戦争は長びいた方がよいと書いている。それだけ長く、彼は軍医として勤務出来るし、その間ロシア語も出来ると考えていたわけである。

「自分ハ日本ニハ不適當ノ人物ナリ」と書く心情に、むしろ同情さえ感じてしまう。そしてまたロシア領でも日本医師が開業出来るのを望んでいたのである。

〔ロシア通信 11〕(大正五年九月五日)

益々清榮奉賀候

最早九月トハ相成申候、此地ハ冬服ニテ朝夕ハ外套サへ必要ニ候。(中略)

「スモレンスク」ヨリ差上候写真三枚ハ御落手候ヤ。之レモ多分如何ニ遅キ「ロシア」郵便ニテモ今頃ハ到着ト存候。(略)

「スモレンスク」侯爵令嬢ハ町ニテ有名ノ美人ニテ自分デモ大天狗ナリキ。

此地ハ例ニヨリ独乙ノ飛行機ノ時々飛来スルノミニテ其他ハ極メテ閑散、毎日十数人ノ小外科ノミニ過キス僕モ余リ閑散ナルニヨリ南部ニ移転志願中ニ候。

「ロシア」ニテハ専制国ニ似合ハス官吏ナドハ或程度迄ハ本人ノ意志ニ任カシ任地撰定ノ自由ヲ与フル様ニ候、之レハ昨今ニ至リ聞キシ処ニ候此ノ様ナコトガ予メ知レ居リシナラバ数ヶ月毎ニ見物ヲ兼ネ転移スレバ面白キカト存候。(中略)

僕ハ今月ノ末ニ多分新任地ニ行キ得ル事ト存候、其地ハ「キーエフ」ト称シ今ヨリ五六百年前(日本ノ北條時代)ニ日本ニモ攻メ来リシ元ノ忽必烈ノ連中ノ一部カ遙ニ此地(ロシア)ニ来リ「キーエフ」ニ約二百年間都セシ処ニ候。「ロシア」ノ歴史ト言葉ニ精通スレバ中々ニ興味アル可キモ僕ニハ唯田舎漢ノ東京見物ト同様ニ過キサルハ残念ニ候。(後略)

関餘作の書簡からは、戦争の激しさなどというものはほとんど感じられないのは、現在と違って、武器なども戦車をはじめて姿を現し、飛行機が飛んだのも、この大戦が最初であつたから、大砲の音が聞こえるか、敵味方銃剣をかざして戦うほかは、戦争という実感は湧かなかつたのかも知れない。

前掲の書簡で省略した中に記されていることであるが、当時閑院宮殿下や貴族院の連中がペトロに來遊するとか、また觀戰武官として來ていた福田という陸軍大佐が、腸チフスに罹つて、ロシア赤十字に雇われていた日本人医師三輪美之輔という人が、ペトロから往診した事などを書いてゐる。

彼はまた別の場所に勤務したいと、考えはじめた。多分「キーエフ」という場所だと書いている。

「数ヶ月毎二見物ヲ兼ネ転移スレバ面白キカト存候」と記しているが、関餘作は大変好奇心の強い人間であり、また同じ場所にじつとしていることの出来ない一面を持ちあわせている人物のように思うのである。

自分自身でも「自分ハ日本ニハ不適當ナ人物ナリ」とおのれを認識しているのだろう。

彼は札幌の友人佐山氏にこの手紙（通信11）を出したあとすぐに恩師の舟岡教授に出している。佐山氏に宛てた内容と同じ箇所は省くが次のような内容である。

〔ロシア通信 12〕（大正五年九月九日）

（前略）此地ハ昨年以来一回ノ戦闘ダニナクシテ閑散、此調子ナラバ或ハ遂ニ戦闘ナクシテ終ルヤモ知レズ候。内科ノ病院ハ多キ様ニ候、スコルブート（ドイツ語）ノミニテモ毎日初診ハ数十人モアル由ニ候、就テハ小生モ更ニ転隊ヲ思立チ先日其願書ヲ提出致置候（中略）

即小生モ目下最モ多忙ナル南部方面ニ移ラント存候。多分ハ奥国ノ境ナル「キーエフ」ニ至ランカト存居候。

（中略）

ロシアハ医学ノミナラズ凡テノ方面ニ於テ優逸ノ人物アル代リニ平々凡々ノ徒多キハ驚ク可ク候、誠ニ不均一ノ国ニ候。（中略）晴天ニハ殆ド毎日一二回ハ敵ノ飛行機来リ申候、時ニハ夜間ニモ来リテ爆弾ヲ投ズルコトアリ、国際公法モ何モ関スル処ナク市街ノ頭上ニテモ落下致候。此時ニ味方ヨリハ射撃スル等ニテ中々ニ壯觀ニ候。

此調子ニテ戦争ヲ為セバ何年ニテモ続キ得ベクト存候。尤モ塙国ニ対シテハ多少攻撃的態度ナルモ此方面ナドハ一步モ先進マズ唯防的ノミニ過ギズ候。(後略)

ドヴィンスクから南の方へ轉移したいと、転勤願を出したのは、九月初めある。一ヶ月で漸く許可の内報があつたらしい。

ドヴィンスクから十月七日付の葉書を、関は佐山氏に書いた。それには、「転勤願ヲ出シテ一ヶ月ニシテ漸ク許可ノ内報アリ、近日中、キーエフへ出立ノ筈、途中スモレンスクニ寄ル積……」とある。

彼はドヴィンスクより更に戦線に近い場所へ行くことになる。

「キーエフ」へ行く途中、彼はスモレンスクで下宿していた侯爵家を訪ね、大歓迎を受けたことを友人に書き送った。

七、キーエフ、ウエルバからのロシア通信

〔ロシア通信 13〕(大正五年十月二十一日)

——僕去十三日夕、ドヴィンスク発車、翌朝「スモレンスク」ニ着、直ニ以前ノ下宿ノ侯爵家ニ行く、大歓迎ヲ受ケ三泊。

十七日夕出発、途中乗換三回昨夜キーエフニ着。中々予想以上繁華ナル町、此町ヲ流ルル川ハ、ドネーブル川

ニテ即チ「スモレンスク」ハ此上流ナリキ。此画ハ銀座通りニテ「ペトロ」以来久々ニテ都会ニ出テシ感アリキ。然シ僕ハ滞在数日前線ニ行ク筈ニ候（後略）（傍点筆者）

キーエフ 関 餘作

関餘作がキーエフに着いたのは、十月二十日の夕方で、途中三泊したことは彼にとつても楽しいひとときであつたろう。

彼は「キーエフ」と書いているが、「キエフ (KIEV)」のことでウクライナの首都。

また傍点を附した「此画ハ……」というのは葉書（ロシア通信13）の裏はキエフ市の繁華街の写真になっていて、にぎやかな場所のため銀座通りと書いたのである。

彼の勤務する所はキエフの病院ではないことがわかる。数日間ここに滞在し、その間準備を整えてウエルバという、小さな村に設けられている野戦病院に行くことになる。

ウエルバという所は、当時のロシアとオーストリアの国境近くのようなのである。

彼は十月の末頃、ウエルバに着任し、十一月に入ってから、札幌の佐山氏、恩師の舟岡教授に手紙を書き送った。

〔ロシア通信 14〕（大正五年十一月八日）

（前略） 僕ハ今月十三日「ドヴィンスク」出立、途中「スモレンスク」ニ立寄り幾多ノ知己ニ会シ数日滞在シ、

更ニ南下シテ「キーエフ」ニ来リシガ僕ガ運命ハ此一寒村ニ在勤ト定マリ又タ一昼夜汽車ニ乗り此地ニ来リ申候。

此地一帯昨年末塙軍ニ占領セラレシガ、今夏露軍之ヲ恢復セシ由ニテ塙露ノ国境ノ「ドーブノー」市ノ隣村ナリ、恐ラク地図ニモナキ処ナラン。民家ハ皆破壊セラレ僅ニ残ル二三ノ民家ヲ利用シテ此病院ヲ經營ス。此処ハ從來僕ノ經来リシ中ニテ最モ多忙ナリ。毎日前線ヨリ新患者ヲ受ケ之ニ相当ノ処置ヲ為シ「キーエフ」へ後送スルニアリ。此処へ来ル迄ニ負傷兵ハ二ヶ処ノ病院ヲ經過シテ来ル由ナレトモ皆多忙ノ故ニヤ碌々手当モ為サズ、一週ニ二三人ハ骨折後ノ壞疽ニテ死ニ瀕スル者アリ。

此等ハ早く適當ノ時期ニ「アンプ」シテヤレバト思フガ「ロシア」ノ負傷兵コソ実ニ慘憺、骨折ノ患者ハ五万何棒□部ノ貫通銃傷ニテモ始メニ消毒不完全ノ故ニヤ化膿スル物十中八九ナリ。「ロシア」医学実ニ不完全、□□成リ居ラズ加フルニ看護婦ハ殆ント軍医以上ニ尊敬スルコトトテ一層ノ権力アリテ威張り腐リ居ル事トテ軍医ノ命ナドハ用ヒス自己デ勝手ニ処理スル物多シ。

殊ニ不便ナルハ「ロシア」ノ陸軍ニL形ノ手ヤ足ニ用フル副本ナク、毎々厚キ板紙ヲ切りテ作ル事トテ時間ヲ要スルコト甚シ。僕カ露語今少シ完全ニ發達スレバ「ロシア」人ニ教授シテ遣リ度キ事ハ沢山ニアリ。此地ハ南方ノ事トテ大ニ温ク晴天ノ時ハ外套ナシニテ散歩シ得ラル。雪ハ勿論未タ見ス。

此村ハ実ニ一農村、目下ハ停車場ト此病院アルニ過キス、恐ラク琴^{*}似位ノ農村ナラン活動モ芝居モ何ニモナシ、唯茫々タル平野ヲ散歩スルニ過キズ、目下ハ各軍医ト雜居室ノ事トテ讀書ナト思フ様ニ出来ズ耐ヘ得ル限りハ忍ハレモ来年二月頃ニハ又タ「スモレンスク」ニ転セシ様志願セントス。

「ロシア」ハ国柄ニ似合ハス個人ノ意志ヲ重ンスル処ガ奇妙ナラズヤ。

戦争ハ最早冬期ニ入レバ殆ント休戦モ同様ナラン或ハ五年モ続クト言フ人モアル共恐ラク猶ホ一年ハ続クナラシカ。

僕ハ可成戦争ノ長カレカシト祈レリ。此処ニモ飛行機ハ度々来レトモ病院以外ニ何等兵営モナキ事トテ爆弾ハ来ラス、此点ノミハ安全ニ候。

先月ノ始メニ此次ノ駅ニテ病院車ニ爆弾落下シ軍医ヤ看護婦負傷セシト云フ。

札幌モ愈々大学建設ノ事ニ決定ノ由、病院モ益々繁昌ノ事ト存候。

戦後ニハ暫時「ペトロ」ニ浪人シ一応ハ帰朝、其節ハ諸兄ニ面会ヲ得度存居候。

「ロシア」ハ一般ニ水ニ不便、大市街ハ水道アレトモ此処ナドハ井アルノミニテ水ハ日本ノ如ク充分ニ使用スル事ハ出来ス、毎朝ノ洗面モ「コップ」ニ数杯位ノ物ニ候。万事生活ノ不自由ハ中々ニ意料ノ外ニ候。然シ僕ハ先年十勝山中ノ時代ヨリ僻地生活ニハ慣了ノ事トテ別ニ苦シトハ思ハズ唯幸ニ頑健如旧、三度ノ食事ハ人並以上、此院長ハ好々爺ニテ僕ニハ何時モ「ソップ」ノ御代リヲ許ス。「ロシア」料理ハ第一、「ソップ」ト第二ニ肉料理一皿、第三ニ水菓子又ハ之レヨリ製セシ物ナルガ、戦地附近トテ此第三ハ此地ニハナシ。時々ハ米ガ喰ヒ度ヒデス、先ハ右迄匆々

(※札幌市西区琴似町)

於ウエルバ 餘作 拝

彼は友人に、餘作宛に手紙を出すときには同封してある小片を貼付するようにと、手紙のさいごに書いている。小片には餘作の現在勤務している場所が記されたもので、それを手紙の封筒に貼るようというわけで、それは次に示すような場所である(原文は露語だが日本語にして示す)。

ロシア 出動部隊 463 移動野戦病院 日本人 関 医師殿

ウエルバという地は、地図では見当たらないが、「ドーブノー」市の付近という。地図には「ドゥブノ (Dubno)」とある。

彼がロシアの軍医となつてから最も忙しい勤務地であつたようで、医療事情、生活環境など詳細に書いている。看護婦の行動についても、軍医よりも威張っていることなど、考えもしなかつたに違いない。そして「ロシア人ニ教授シテ遣り度キ事ハ沢山ニアリ」と嘆いている。

しかし関にとってこの地の勤務は、かなり辛いものであつたらしい。

「耐へ得ル限りハ忍ハレモ来年二月頃ニハ又タスモレンスクニ転セシ様志願セントス」とも書いている。

この手紙を出して間もなく、関は恩師の舟岡教授にも手紙を出した。内容は佐山氏に出したのと、重複する内容が多いが、重複しない部分を次に紹介しておく。

〔ロシア通信 15〕（大正五年十一月二十七日）

（前略）此病院ハ第一線ヨリ後方五邦里ノ処ニアリ以前ノ病院ト同ジク野戦病院ニテ軍隊ト共ニ移動スルモノニシテ毎日前線ヨリ新病傷者ヲ受ケ、之ニ相当ノ処置ヲ為シ汽車ニテ後送致シ候。

一週ニ三四回輸送スルモ尚ホ毎日百余人ハ残り居リ候。併シ冬ノ蟄居時代トナレバ全ク休戦同様ニ付更ニ閑散ノ事ト存居候。

戦争ハ少シモ活動ナシ夫レモ其筈両軍共ニ山ナキ河ナキ平野ニ陣取り壕内ニテ對抗シ少シデモ頭ヲ出セバ射撃セラルコトトテ手モ足モ出シ様ハナキ事ト存候。（中略）露西亜医学ハ実ニ不完全極マル物ニ候。

第一ニ欠点トスベキハ欧州一般ノ男卑女尊ノ為メ無職ノ看護婦ガ殆ンド医者カノ如クニ万事ヲ行ヒ居リ堂々タル軍医モ之ニ反抗シ得ザル（中略）

先般此地ヘ赴任ノ途次キーエフ市ヲ通過シ一夕同市散歩ノ時途上日本将校三人ヲ見ル。加賀ノ旧藩主侯爵前田大尉及其従者二人ニ候。一行ハ目下英国滞在中ナルガ、戦時ノ露西亜視察ノ為来遊セラレタリトノ事ニ候。之ガ当分最後ニ見シ日本人ニ候。

此方面ニハ一人モ同胞ハ無ク絶海ノ孤島ノ住人同様ニ候。（後略）

於ウエルバ 餘作

舟岡教授宛の手紙に書かれているように、当時の陸軍の戦いの模様が、現代のすぐれた武器を使用して行われるの

と違って、至つてのんびりしたものと想像出来る。壕を掘つて穴の中に入つておれば、敵から撃たれることはないというものである。「日本男子ニハ到底耐フル能ハザル処ニ候。今ノ模様ナラバ二三年ハ続クナランカト存候。或ハ数年ニ亘ルナド云フ人モ有之候」と書いている。

彼はスモレンスクにまた転勤したいと願っていたが、スモレンスクではなく、ルーマニア方面への転勤の電報が届いた。

大正五年十二月十七日の午後、その電報は関餘作の手許に届けられ、彼は直ちに準備をし、その日夕方出発するといふ、大変あわただしい一刻であつた。

赴任地はルーマニアの「ヤーシ」といふ街である。彼はこの地をヤスイと書いているが、地図には「ヤーシ (Iasi)」或は「ヤシ」とある。

次にルーマニアからのものを紹介する。

八、ルーマニアからのロシア通信

〔ロシア通信 16〕(大正五年十二月二十三日)

(前略) 転任ノ電報アリ去十七日ノ午食後其電報ヲ受取り直ニ荷造リ為シ其夕六時ウエルバ出立、途中三回ノ乗換ニハ僕モ殆ント閉口(中略)三昼夜ニシテ此処ニ来レリ「ルーマニア」ハ政治ト云ハ実ニ支那ニ相似タリ、自

国ニハ何等ノ生産物ハナク皆仏独等ヨリ仰キシモノナリトカ、陸軍ナドハ殆ント□□□ナラン。其首府「ブハ（カ）レスト」恐ラク□□□其倭敵ニ渡セシナラン。

僕ノ目下ノ処ハ「ヤスイ」ト称シ第二ノ都市、大学モアリト云フ（中略）

口語と口貨幣ハ通用、「ルーマニア」ノ錢ハロノ錢ヨリ又タ一層安ク物価ハ「ロシア」ヨリ安キ様ナレトモ洗濯石鹼ハナク「シャツ」ハ破レル迄着テ棄テサル可カラス。汽車ノ窓硝子ナドハ破レテモ代ハリナキ事トテ其倭ナリ、「ストーブ」ハナク万事ハ日本以下ダ、欧州ニモ此ノ如キ国アルヲ怪シム、昨日ノ新聞ニハ先般独軍ニ占領セラレシ「ブゼオ」市―此地ノ南二百邦里ハロ軍之ヲ恢復セシト云フ、先ツ此処迄ハ敵モ来リシ、此処迄ハ「ルーマニア」ノ汽車ニテ送り来リ此処ニテ巻換ヲ為シ「オデッサ」ニ後送ス、尤モ救急ヲ要スルモノハ此地ノ陸軍病院ヘ送ル、中々慘憺タル者ナリ。此処ハ患者輸送本部ノ様ナ物ニテ、部長ハ陸軍ノ大尉、軍医部長ハ一等軍医正ナリ、十五人ノ軍医ト数十人ノ看護婦アリ、一時二二三三百モ着シ之レニ大急キテ処置シ、汽車次第「オデッサ」ニ送ル、□□モ何ニモアツタ物ニアラズ、蓋シ此等ノ患者ノ豫後コソ実ニ憐ハレナレ。骨折ヤ脳ノ挫傷ナドハ五万何棒トアリ皆ナ善ヒ加減ノ処置ヲ為ス、「オデッサ」ニ行キ始メテ稍完全ノ処置ヲ為スナラン。

先日ハ「ロシア」ノ各新聞ニ独乙カ頻リニ講話ノ念アリナト記セリ、其実ロシア自身カ之ヲ欲スルニアラスヤ、「ロシア」ニテモ食料品ヤ其他ノ□□□□、先日モ軍夫トシテ若干人□□、蒙古人ヲ送り来リシト云フ、兵卒ナドハ平和渴望ノ念頻リナリ。

此様ニ戦争カ愚図々々スルハ到底日本人ニハ解セヌ事ダ（中略）

恐ラク「ロシア」ニテハ皇帝以外ニ此ノ如キ觀念アル物ナキナラン、第一ニ陸軍大臣サヘ独探ノ嫌疑ニテ入牢ノ始末ニテ日本人ノ如ク赤心報国ノ念ハナシ(後略)

於ヤスイ 餘作 拝

ルーマニアのヤーシというところの野戦病院に勤務する関餘作の目に映るのは、ルーマニアの状況、そして負傷者への対応の仕方の貧しさだった。しかも一般の兵士たちは、皆平和を渴望していると、冷静に見抜く。

勝つと考えているのはロシア皇帝だけだとも言う。ドイツが講話を望んでいるというが、ほんとうはロシアの方が望んでいるのではないかと、関の観察は鋭い。

戦線に一番接近している野戦病院での勤務は、嫌でも現実の姿が眼に入ってくる。

オデッサへ後送する間の応急処置が主であるが「骨折や脳ノ挫傷ナドハ五万何棒トアリ皆ナ善ヒ加減ノ処置ヲ為ス」と書く彼の心もおだやかなものではなかっただろう。

それでも、彼は故国を遠く離れた異国の地で、戦さで負傷した兵士たちの治療を続けるのも運命と考えていたのか。ウエルバからヤーシに向かって出発する時、札幌の友人に出した葉書は数行の簡単な文面だが、その中に「僕又タ、ルーマニアのヤスイニ転任今日出立、東・漂・西・泊・又・多・忙・ナル哉」(傍点筆者)と記しているが、東漂西泊の四文字に、ロシア帝国軍医関餘作の心情がこめられているようで、むしろ痛々しさを感ずる。そして大正六年元旦の日付の葉書には、「……第二回ノ新年モロシアニテ迎ヘ申候。餅モ酒モ無キ寂寞タル正月ナル哉」と書いている。日本のにぎやかな

正月風景が頭の中を去来したかも知れない、と思うと一層彼の心情が伝わってくるような気がする。

関はこの年（大正六年）の元旦は、故国のことに思いを馳せたのだろうか。札幌の友人、岡山医専時代の恩師、そして佐倉順天堂病院の佐藤恒二氏に手紙を書いた。

次のは佐藤恒二氏に宛てた書簡である。

〔ロシア通信 17〕（大正六年元旦）

（前略）目下ハ露西亞本国ノ各方面ハ雪中ノコトトテ殆ド休戦モ同様ニ候ヘ共此方面ハ氣候温ニシテ東京辺ノ如ク雪モナク昨日来ハ雨サヘ降りシ次第ニ候。

此処ハ患者輸送本部トテ前線ヨリハルーマニアノ列車ニテオデッサニ送ル所トテ別ニ手術ハ行ハズ皆応急ノ処置ヲ為スニ過ギズ実ハ甚ダ下ラナキ所ナレドモ先ズ暫時辛抱致シ居候。（中略）

小生等ハ戦線付近トテ牛肉ヤ砂糖等ニハ不自由モナク平素ノ通りニ候ヘ共、露西亞本国ノ各都市ニテハ牛肉ハ一週ニ二回位シカ発売セザル由ニ候。

此町□□□□第二ノ都市ニテ目下国王モ此処ニ遁レ来リ先日ハ王妃此処ニ御来臨アリ。小生等ノ作業中ニ来觀セラレ露西亞ノ大使ト共ニ何カ佛蘭西語ニテ小生ニ言葉ヲ賜ハリキ。然シ別ニ有難クモ感ゼズ候。

小生共ハ、十五時間交代ニテ、此当番時間ニ列車ノ二三回モ着スレバ夫レコソ大騒動ニテ消毒モ何モアラバコソ唯手取り早く処置スレバ宜シク候。（中略）

市中ハ露西亞語ハ用ヒズ佛蘭西語ハ通ズル様ニ候。(中略)月給ハ露西亞貨ニテ支給セラレ候へ共、市中ハルーマニア貨ヲ用ヒ候。露西亞貨壹円ニ対シ、ルーマニア貨ハ貳円六拾錢位ノ値ニ候。

此前面ノ敵ハ独逸兵ノミナラズ土耳其兵モ居ル由ニ候。独逸捕虜ニハ二三回遭遇致候。露西亞兵ハ□□□□一
寸シタ切開スラモ泣キ叫ブ者多ク殆ト閉口ニ候。(以下略)

佐倉順天堂病院の佐藤恒二氏に宛てた書簡の内容は、今記した通りであるが、同じ日に舟岡教授にも出している。だが内容的には佐藤氏に宛てたものと大同小異なので、紹介を避けることにする。前線にいるためか、食糧などは不足していないようである。

九、おわりに

だが一方、ロシア国内では戦争が長びくとともに、市民の生活は窮乏し、政情の不安が高まっていく情勢にあった。前にもふれたが、この年(大正六年)にはアメリカが参戦したことによって、大戦の将来にとって決定的な意義をもつ事が、ロシアにあらわれてきた。アメリカはこの年の二月ドイツと国交を断ち、四月六日ドイツに宣戦する。

その一方、ロシアの政情不安はますます高まり、ロシア帝国の宮廷の実力者と言われていたラスプーチンが暗殺された。一九一六(大正五)年十二月である。

そして一九一七（大正六）年三月、首都ペトログラード（のちレニングラード）で食糧危機による大ストライキがおこった。

このストライキは大衆運動に発展し、政権を揺るがす事態に発展、遂にニコライ二世は三月十五日退任し、弟のミハイルに譲位したが、民衆は帝政の存続を許さず、ミハイルも即位を拒絶し、三百年にわたるロシア帝国のロマノフ朝の支配は終わってしまう。

そしてロシアには、臨時政府と労働者・兵士のソヴェエトとの二重政権が生まれた。

これが二月革命と呼ばれ、これによって革命の第一段階は終わる。

四月レーニンが亡命先のスイスから帰国するや、いわゆる「四月テーゼ」と言われる革命の目標をしめす。これらが、十月革命へと発展していく。

だが、戦争は続けられていた。ロシア国内の動揺の中にあつて、戦線の状況はどうだったのか。

前線におけるロシアの兵士たちは、革命後はそれまでと変わって威張り、驕り、乱れに乱れた様子を関餘作は書き送った。

それらの書簡についての紹介は、次回に譲ることにしたい。

関餘作が、ルーマニアの「ヤーシ」に勤務していたのは、一九一八（大正七）年五月はじめまでで、それから「オデッサ」へ寄り、「オデッサ」から南露を経て西シベリアへ。そして「イルクーツク」に到達する。

イルクーツクに到着したのは、七月二十九日である。途中到る所で内乱がおこり、困難を極めながら、やっとイル

クーツクに着いている。

次回では、イルクーツクに到着するまでの様子を書簡を通じて紹介したい。

なお、彼はそのあとイルクーツクからウラジオストクに行き、この地で医療に従事したことをつけ加えておきたい。直接、ロシア革命の奔流の中に巻き込まれることはなかったが、その余波を彼は肌で感じ、兵士たちの変ぼうを見ながら、西シベリアへ向かうことになる。(以下次回)

付記 このテーマについては本年度開催の『第九十四回日本医史学会総会』（金沢大学医学部・五月十五日～五月十六日）で発表。

※参考文献

- 註1 『岡山医学同窓会報』七十二号、一九九二年
- 註2 『原野を拓く』——関寛・開拓の理想とその背景——陸別町郷土叢書第一巻、平成三年
- 註3 徳富健次郎『みみずのたはこと』(上)、岩波文庫、一九七七年
- 註4 戸石四郎『関寛斎』三省堂選書、一九八二年
- 註5 徳富健次郎『謀叛論』所収、岩波文庫、一九七七年
- 註6 大門一樹『物価抵抗史』三省堂、昭和四十三年
- 註7 (註6と同じ)
- 註8 日本近代史研究会『図説・国民の歴史11』国文社、昭和三十九年